

センメルヴェイス氏と産褥熱

センメルヴェイス・イグナツ・フュレプ氏はハンガリー生まれで、ウィーンの病院で産科の医者として働いていた人である。彼は1850年頃にウィーンの総合病院で産科の助手になり、そこでは妊産婦の13%余りが産褥熱で死亡していた事実を知った。センメルヴェイス氏が勤めていた病院には産科が二つあり、第一産科の死亡率が第二産科よりはるかに高かった。

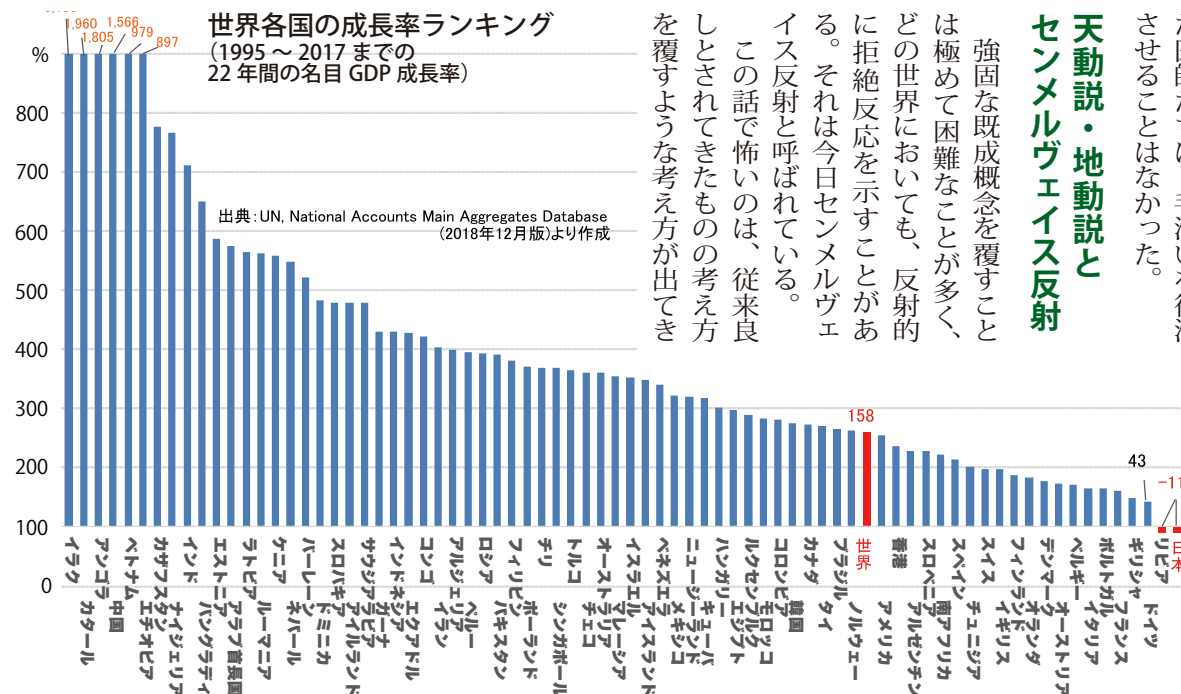
第一産科は医者や医学生が担当し、第二産科は助産婦が預かっていた。彼はなぜ第一産科の死亡率が高いのかをいろいろ研究するうちに、第一産科の医者は解剖などを行なった後に出産に立ち会うことが多く、その際に感染症の菌を妊産婦に持ち込んでいたのではないかと考えた。

感染症予防の父の悲劇

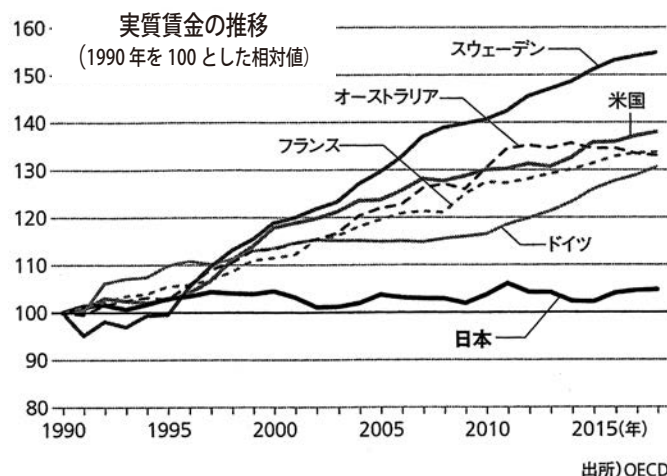
センメルヴェイス氏は直ちに、手洗いに關する厳格な規制を導入し、今日でいうカルキの入った水溶液で両手を消毒することを義務付けた。すると何と18%程度だった死亡率が0・2%にまで激減するという大きな効果を生み出した。しかしこの発見は、産褥熱に關する専門の医者、ベテランの医者連中の考え方を真っ向から否定するものだったため、センメルヴェイス氏の職を奪ってしまった。

国民を豊かにする政治を

世界各国の成長率ランキング (1995～2017までの22年間の名目GDP成長率)



実質賃金の推移 (1990年を100とした相対値)



今日ではセンメルヴェイス氏は消毒法の父、感染症予防の父と呼ばれるほどの名声を得ているが、生きていた間は専門家からはまったく評価されず、専門家との争いの中で傷を負い、その傷がもとで亡くなった。

天動説・地動説とセンメルヴェイス反射

強固な既存概念を覆すことは極めて困難なことが多く、どの世界においても、反射的に拒絶反応を示すことがある。それは今日センメルヴェイス反射と呼ばれている。この話で怖いのは、従来良しとされてきたものの考え方を覆すような考え方が出てき

た時、世の中が起す拒否的な反応だ。天動説と地動説もそうだった。地球は宇宙の中心にあつて静止し、すべての天体が地球の周りを公転しているという天動説に対し、カトリック司祭だったコペルニクスが異を唱え、天動説では天体の動きを正しく解釈できないとして地動説を主張した。その後、ガリレオ・ガリレイをはじめ多くの学者が地動説を主張したが、多くが裁判にかけられ、軟禁生活などを強いられた。

センメルヴェイス反射 状態の日本経済学

現在のわが国の主流派経済学は財政危機をあまり続け、財政破綻の危険があると見て、財政出動を厳しく制限すべきだという主張を繰り返してきた。東日本大震災の際には地震発生からわずか2カ月後、現地はまだ大勢の行方不明者を捜索中で、当時もデフレ経済だったにもかかわらず、国民からお金を収奪することになる増税を主張して、結局それが通ってしまった。日本は財政危機宣言以降のこの25年間、財政破綻の恐れの前にはただただ恐れおののいて世界の趨勢から大きく切り離されて行ったが、それを象徴する政策だった。

財政再建至上主義の日本

その結果、わが国は経済が成長しなかったために税収が伸びず、財政が非常に厳しい状態が続いてきた。この22年間の名目GDPを示した国連射」状態ではないのか。長く日本を引っ張ってきた主流派経済学「新自由主義経済学」は、政府は小さければ小さい



発行：海電社
定価：1700円＋税

「国土学」が解き明かす日本の再興 大石久和著

「国土に働きかけなければ、国土からの恩恵は得られない」と国土学を提唱する著者が、日本国土の自然・地理的条件や、日本人特有の歴史観・死生観を、諸外国と比較しながら多角的に分析し、日本国家にもっとも適した国づくりの方針を導き出します。

ほどこい、自由化や民営化はすればするほどいい、規制はできるだけ緩和すればいい、との考え方で、より小さな政府を目指してきた。それが日本の停滞、下落に直結しているわけだが、それに代わる学説がなかなか生まれてこなかった。国民を豊かにできない経済学などそもそも間違っているのだ。

国民を豊かにする政治を

小さな政府を目指し、規制を緩和し、自由化や民営化を進めた「新自由主義経済学」は、既に破綻しているにもかかわらず、経済学者らはそれを認めない。しかし、その当然の結果として国民の貧困化や労働者の非正規雇用化が進み、結婚できない所得層が生まれ、子供の数が減って、生活保護が急増し、働かざるを得ない主婦が増えている。財政危機宣言が出された1995年以降、日本人の賃金・給与はほとんど伸びていないが、これは先進国で唯一の現象だ。わが国の今の状況は、政治が本来目指すべき方向「国民を豊かにすること」でないことは明らかである。